

周辺の環境を高める建築 - 独立住宅の設計から -

KS
DP 関西大学
戦略的研究基盤
団地再編
リーフレット
Re-DANCHI leaflet

文部科学省 私立大学 戦略的研究基盤形成支援事業
『集合住宅“団地”の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究』

SEPTEMBER
2012
VOL. 072



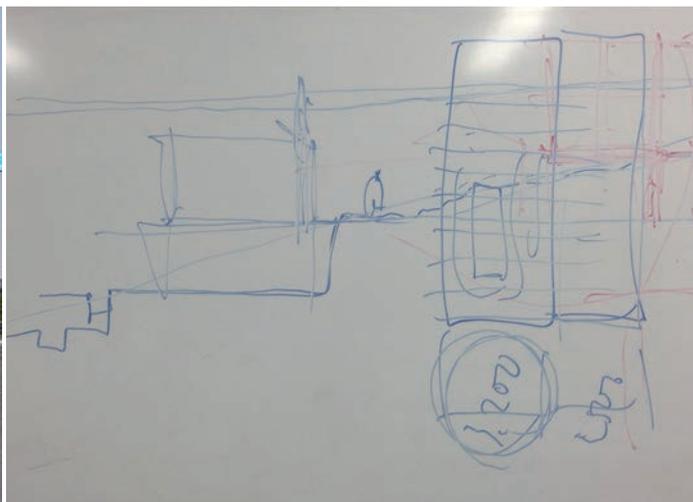
■ 101 番目の家（ひゃくいちばんめのいえ）



■ 東豊中の家（ひがしとよなかのいえ）



■ 箱作の家（はこつくりのいえ）



■ 竹原氏が描く断面スケッチ

周辺の環境を高める建築

本研究の主眼としている集合住宅団地の再編では、市街地の中で一団の固まりとなり特異な場所となっている“団地”を、小規模な単位に区分し、自立更新できるような形態に再編し、居住者が愛着を持てる空間へ再編することが、重要な課題となっている。その際、再編された団地の空間が周辺市街地の環境をも高めていくような役割を担うことが期待される。

大学院生による分析

本稿では、設計した建築のみならず、周辺の環境も高めている建築家・竹原義二氏の実作を通して、その建築と周辺環境との関係性を分析する。分析の方法は大学院の授業形式を採用した。これは、大学院生が竹原義二氏の作品を一つずつ採り上げ、建築雑誌等から建物の基本情報を収集し、そして必ず現地へ赴き、実際の建築と周辺環境を分析する。周辺の建物や周辺の地形との関係、その場所の風、光、

音といった建築雑誌などには掲載されない部分を感じとることが重要である。そして、その建築が周辺環境を高めていると考えられる理由を、図面や写真を用いて独自の視点でプレゼンテーションする。

設計者との対話

通常は大学院生のプレゼンテーションのみであるが、本稿では設計者である建築家・竹原義二氏の前でプレゼンテーションし、その建築や周辺環境の読み取り方・高め方について設計者との対話を行った。竹原氏はプレゼンテーションを真剣な面持ちでメモをとりながら聞き、その住宅ができた経緯や設計段階で考えていたことをとてもわかりやすく解説していただいた。

現在の団地は周辺の環境とは無関係につくられているが、今後の団地の再編を通して如何に周辺の環境となじみ、また高めていけるのかについて考えるきっかけとなった。

■東豊中の家

□はじめに

東豊中は千里丘陵の一角にある第一種住居専用地域であり、大きな住宅が数多く集まる高級住宅地であった。斜面地を造成してできた住宅地はバス通りから少し中に入ると足下は擁壁によってできる影で少し暗い印象を与えていた。坂道を下ると見えてくる三ツ池のそば、旗竿の土地に東豊中の家は建っている。池の周縁は散歩道となっていて、私が訪れた4月はちょうど桜が満開であった。近くに住む老夫婦や小さな子どもを連れのお母さんの姿も見られ、とても気持ち良い散歩道であった。

私が建築雑誌をみてこの住宅を選んだ理由は配置図にある。周辺とは違った不整形な土地は一般的には住宅が建ちにくい。そんな土地に対して、2つの箱がズレながら貫入した様なプランは明らかに周辺にある住宅とは異なっていた。この特殊な敷地で竹原氏が考えたことはなんだったのだろうと興味を湧いた。そして、実際に訪れてこの住宅が「周辺の環境を高めている建築」だと感じた理由は大きく二つあった。

□ズレによる周辺との関係

一つは平面的なズレ、断面的なズレによってうまれる周辺との関係。整形の土地に四角い住宅が建つ周りの建物とは違い、この住宅の外部空間には余白がうまれている。余白には光が入り、風が抜け、居住者の生活感がまちに対して表れている。丘陵から吹く風が池の上を抜け、二階の家族室を通して住宅が立て込む敷地の隅に抜けて行くのだろう、家族室は夜になると暗くなりそうな散歩道に明かりを灯すだろう、などと想像を膨らませていた。

竹原氏はこの住宅では柱と壁がずれていることが重要で、対角線上にどう視線が抜けるかということを考えていたという。大きな屋根の中に入れ子式の部屋を配置していきながら内部空間に豊かさを生み出して

いった。

□周辺を引き立てる素材、色

二つ目は周辺を引き立てる素材、色である。決して高価な素材ではないがブリキのトタン板の赤錆色や鉄色が桜並木のピンク色や菜の花の黄色、青い空を引き立てる背景となり、季節の移ろいを1つの風景として印象づけていた。

竹原氏は「まちの人々もバス通りから一瞬見えるこの住宅をなにか気持ちのいい、まちのランドマーク的な家と言っている」というお話をしていた。なくなってしまうかもしれない風景。その一瞬を心に留めるように、この住宅に住む子どもの原風景になって欲しいという想いを込めたという。

□建築家としての役割

「同じ場所に同じような生活スタイルの人たちが集まる社宅住まいの生活から離れたい。」

そんなクライアントの要望を受け、敷地を探すところからスタートしたという。敷地を読み解いて敷地を選ぶこと、家族との対話の中から家族のもつ潜在的な要求を丁寧に汲み取ること、モノをつくることだけでない建築家としての役割があるということを決めた。竹原氏のお話の中から強く感じた。

「風のとおりみちや光の落ちる場所をつくり、室内環境を向上することは同時にまわりの建物、周辺環境を向上することにつながっている。敷地のそとに目を向けることで、より敷地のなかの豊かさを得ることができる。」これは私が感じたことのまとめとして書いた文章であるが竹原氏はまさにこのような事を考えていたという話をしてくださった。

「建築的には特異な事をしていなくても家族夫婦にとって宝物、環境を自分で買い込んで、住みかをつくった。」という竹原氏の言葉にこの住宅のすべてが詰まっているように感じた。

担当：辻村修太郎（関西大学大学院生）



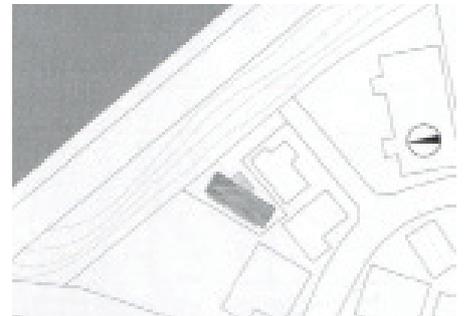
東豊中の家の外観

東豊中の家の概要

所在地／大阪府豊中市東豊中町
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦＋子供2人
設計／竹原義二 無有建築工房

規模／地上2階
敷地面積／185.69㎡
建築面積／67.55㎡
建蔽率／38%（許容40%）
容積率／61.28%（許容80%）
延床面積 114.80㎡
1階 33.91㎡
2階 65.16㎡
屋根裏階 15.73㎡

敷地条件／第1種低層住居専用地域
高度地区 風致地区
道路幅員 東4, 7m
駐車台数 1



配置図



桜並木と敷地の境界にある斜面から



周辺を引き立てる素材感と赤錆色

■ 101 番目の家

概要

所在地／大阪府豊中市
家族構成／夫婦+子供2人
設計／竹原義二・無有建築工房
構造・構法／木造鉄筋コンクリート造
基礎 ベタ基礎

規模／

地下1階 地上2階
軒高 7,805mm
最高の高さ 8,015mm
敷地面積 108.80㎡
建築面積 65.22㎡ (建蔽率 58.9% / 60%)
延床面積 156.21㎡ (容積率 143.4% / 160%)
地階 48.46㎡
1階 52.76㎡
2階 54.99㎡
敷地条件／
第一種中高層住居専用地域 防火地域指定なし
第二種高度地区 法22条地域
道路幅員 北 4.0 m 駐車台数 1台

□ T字路の先にあることが意図された住宅

101 番目の家は T 字路の坂道を下りきった突き当たりにある住宅である。つまり周辺に住んでいる人たちは 101 番目の家を見ながらその坂道を下っていくことになる。そこで、この住宅はこの坂道を下っていく人に対して、この住宅が与えるであろう威圧感を軽減するために前面道路から 2 m 程セットバックしている。ここで考えなければいけない点は、セットバックしているのはあくまでボリュームの威圧感を軽減させるためであってセットバックした空間に車を駐車するためではないという点である。なぜなら車を駐車する空間をつくるためなら 2 階のボリュームをキャンチレバーでとびださせ、1 階にだけ空間をつくれれば良いはずである。なのに、そういった

操作をしていないのは先述した理由があるからであろう。さらに竹原義二氏によると、この住宅の高さを抑えることで坂道を下っていくときに見える開けた空や飛行機や高速道路などの風景がより見えるように配慮されているとのことである。



突き当たりに見える家が 101 番目の家



配置図

□ 周辺住宅に対する配慮

101 番目の家の北側の壁をベイスギとステンレスによって構成されたスクリーンのようなものを使うことで風と光が通るような壁になっている。そのスクリーンのおかげで北側の住宅にも光と風が通り関係性が生まれている。

この敷地は東西で大きな段差があり東側が 1 階分程高くなっている。そして、この 101 番目の家も西側に向かうにつれて徐々に高さを落と

していつている。また、敷地内南西部にはヴォイドが存在する。こういった操作は 1 階程下がった西側隣接する住宅群にも光を届けるためである。

□ 竹原義二氏の話聞いて

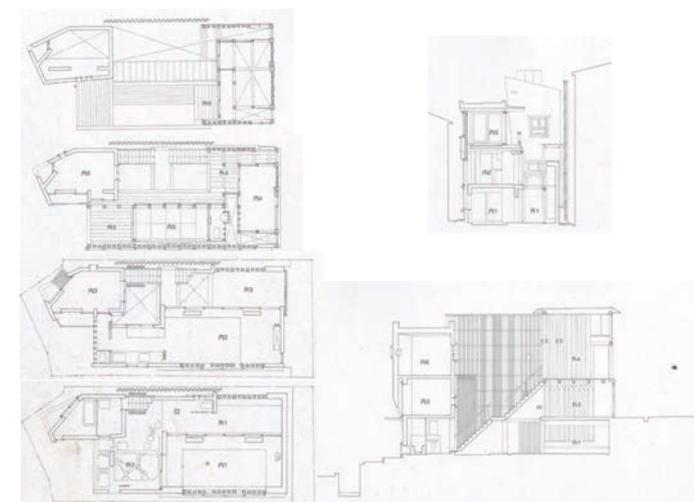
竹原義二氏は

主に素材、土地の選び方、周りの環境の整え方、10 年後、20 年後の住宅と住まい手の 4 つを述べた。特に 4 つ目に関しては次のように述べていた。「住むことで素材が 5 年、10 年、20 年の間に刻々と変化していく。その中でそれをどうコントロールしていくのか。そういったことを考えながらその住宅に住んでいると住宅には味が出てきて、つやが出てくる。しかし、中に住んでいる人は年をとり老化していく。つまり、建築はお金をかければ良くなっていくのに人間だけが徐々に老化していく。その老化していく中でいかに美しさ、楽しさを住宅に見いだすかが住まいの一番の根源だと思う。」雑誌で見る竣工当時の正面写真のとても濃い木の色は威圧的にも感じたが、実際に現地で見えた色は本来の木の色を取り戻しており柔らかな印象を与えていた。そういったことも計算に入れてこの 101 番目の家は建てられている。

□ 周辺環境を良くすること

建築家は施主に要求された空間や外観をつくっていけばいいと思っていた。しかしそれは違って、建築家はこの住宅が建つことで周辺環境をどう良くすることができるのか、施主の 10 年、20 年先のことも考えて住宅をつくっていかなければならない。それは世代が変わっていく中で家族の関係がどう変化していくのか、施主がこの住宅でどのように死んでいくのか、施主が死んだ後はこの住宅は誰によって住み続けられるのかといったようなことである。そして建てられた住宅は 10 年、20 年愛着を持って住み続けていける住宅であり、周辺環境を良くし、更にはその街をも良くすることができるだろう。竹原氏との直接の対話により、そういった建築の雑誌を見ただけではわからない建築家としての本来の役割を考えることの重要性を学ぶことができた。

担当：築田 良（関西大学大学院生）



平面図と断面図



屋上緑化された空間に生活感が溢れ出す。(南東から見る)

■箱作の家

□立地

関西空港を建設する為に必要な土砂を削り取った山の跡地に開発されたニュータウンの三方道路に囲まれた分譲地の一角にある。

□配置・平面計画

北側に二層のL字型の棟、南側に平屋の棟が外部空間を取り込みながら、分棟形式で配置されている。

北側の自動車の通る大きな道に対しては一つの大きなボリュームで構成し、南側の生活道路に対してはボリュームを分割し、歩行者に対しての圧迫感が軽減されている。

また、L字型の棟には、中庭に面して廊下空間が内外に配置されており、内外の境界が曖昧な生活感の溢れ出す場所として計画されている。

□断面計画

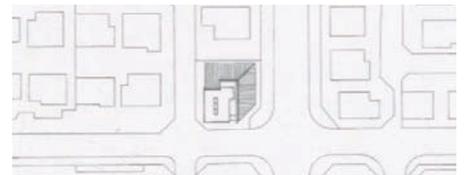
中庭は、個室から連続した地形の様な断面計画により、内部空間から連続した外部空間となり、たまりの空間を生んでいる。建築の内と外の境界が曖昧に構成されている。また、屋上を緑化したスラブは地域と個室との緩衝領域となっている。

□まとめ

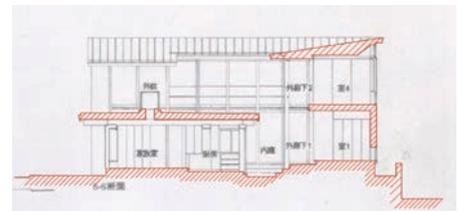
- ・大きな道と小さな道に対してのファサードの作り方の違いが、通りに対する雰囲気の違いを生んでいる。
大きな道＝大きなボリューム
生活道路＝ボリュームを分割
- ・L型と平屋のボリュームのバランスがよく、屋上緑化の部分は地域との緩衝領域となり、生活の場として外部空間を上手く利用できる様に構成されている。
- ・様々なテクスチャーが使用され、ボリュームの分割やスラブを軽く見せるなど、テクスチャーの差が建築全体の構成に影響している。
- ・植栽があることで、ファサードや敷地際の空間が柔らかくなり、地域との緩衝領域となっている。
- ・素材や色の細かな場所ごとの操作によって建物の印象を大きく変えている。
- ・内と外の関係性を曖昧にし、部屋同士・内外との繋がりを強めている。
- ・壁や建具で完全に囲うのではなく素材の違いや空間構成によって領

箱作の家（はこつくりのいえ）の概要

所在地：大阪府阪南市
 主要用途：専用住宅
 家族構成：夫婦＋子供3人
 設計：竹原義二 無有建築工房
 規模：地上2階
 敷地面積：297.30㎡
 建築面積：130.07㎡
 建蔽率：43.75%（許容50%）
 容積率：61.14%（許容100%）
 延床面積：184.75㎡
 1階 113.87㎡ 2階 70.88㎡
 敷地条件：第1種低層住居専用地域
 防火地域 第一種高度地区



配置図



断面図

域性がつくられている。

□竹原氏のコメント

この家には、手すりが一切ついていない。屋上や廊下に手すりを付ける行為は、安全面を重要視するあまり、住むことの楽しさを消してしまっていると竹原先生はおっしゃった。この家には3人の子供が住んでおり、手すりを取り付けなくても子供たちで約束事をつくり、安全面に気を付けながら家の中を走り回っている。それによって子供たちの成長と共に成長していく家がつくり上げられている。竹原氏のお話で平面図には家族のストーリーが書いてあるという言葉が印象的であった。図面からそこに住む家族のストーリーをイメージして読むという図面を読む本当の深い意味を教えて頂いた。

担当：今井沙代（関西大学大学院生）

『周辺の環境を高める建築 - 独立住宅の設計から -』

執筆：辻村 修太郎（関西大学大学院 博士前期課程）
 築田 良（"）
 今井 沙代（"）
 倉知 徹（関西大学 先端科学技術推進機構）

本リーフレットは、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「集合住宅「団地」の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究（平成23年度～平成27年度）」によって作成された。

発行：2012年9月

関西大学
 先端科学技術推進機構 地域再生センター
 〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号
 先端科学技術推進機構 4F 団地再編プロジェクト室
 Tel : 06-6368-1111 (内線:6720)
 URL : <http://ksdp.jimdo.com/>